

太田牛一『信長記』振仮名覚書

金子拓

一 本稿の目的

本稿は、織田信長の弓衆であつた太田牛一が後年執筆した信長の一代記『信長記』について、そのより良質な本文を追究するための基礎作業報告である。本文に付された振仮名（読み仮名）について検討をおこなう。なお『信長記』は一般的に『信長公記』の書名で知られるが、本稿では『信長記』と表記する。

まず、検討対象とする『信長記』の牛一自筆本について簡単に紹介する。以下本稿で触れる『信長記』もしくは牛一著作の伝来・書誌情報については、拙著『織田信長という歴史』『信長記』の彼方へ（）（勉強出版、二〇〇九年）に拠る。

『信長記』は、信長が永禄十一年（一五六八）に足利義昭とともに上洛し、天正十年（一五八二）に明智光秀に討たれるまでの足かけ十五年を、一年一冊（巻）、計十五冊（巻）の構成で記した記録である。十五巻揃いで伝存する牛一自筆本は、京都建勲神社（建勲神社本、以下〈建〉）と岡山大学附属図書館池田家文庫（池田家本、以下〈池〉）に所蔵されている。両者はいずれも国指定重要文化財となっている。

〈建〉は、旗本花房政次（正次・幸昌）が所蔵していた自筆本を、元禄五年（一六九二）以前に大和戒重藩主織田長清（信長の玄孫）が譲り

受け、明治四十三年（一九一〇）に織田家より建勲神社に寄贈されたものである。

〈建〉の直接の写本として、公益財団法人陽明文庫所蔵本（以下〈陽〉）、および長清の末裔織田家の所蔵本（以下〈織〉）の二種がある。〈陽〉は、長清が元禄十二年に近衛家熙に献上した写本であり、〈建〉巻十五の巻尾に、長清がこれを所蔵するに至った経緯と写本の献上がなされるまでを記した家熙自筆の跋文が綴じ込まれている。現在『信長記』の活字本として一般的に利用される角川文庫版『信長公記』（奥野高広・岩澤愿彦編、一九六九年）の底本である。

いっぽう〈織〉は、その長清のもとで作成されたとみられる写本である。以降織田家に伝来した。つまり〈陽〉〈織〉は、〈建〉の直接の写本として兄弟関係にあたるということが出来る。

本稿では、第一に、自筆本のひとつ〈建〉と、その直接の写本である〈陽〉〈織〉の振仮名を比較し、現在自筆本の所在が確認されない「首巻」の良質な本文を追究する。第二に、もうひとつの自筆本である〈池〉（その概要は後述する）と、〈建〉および自筆本が残る他の牛一著作の振仮名を比較し、牛一がみずからの著作に付した振仮名の意味について考えたい。

二 『信長記』 十五巻の振仮名

(1) 『信長記』の振仮名をめぐる研究史

『信長記』自筆本・写本に付された振仮名について、先行研究を確認したい。

〈陽〉を底本とした角川文庫版のはしがき(凡例にあたる)に、「本書の底本には片仮名の振仮名を存する部分があり、比較的古い読み方を残しているように思われる」とある。読み方が古態を示すという指摘である。

本文内容から『信長記』諸本の系統を体系づけた内藤昌氏は、〈建〉について「他本に稀れな程多くの平仮名の振り仮名がみられ、特に片仮名の場合もある。いずれにしても牛一自身の読みが本書で確認できる」と、〈建〉に多くの振仮名が、しかも片仮名・平仮名両様で付されていることを指摘する。また、〈陽〉では〈建〉の振仮名の多くが省略され、「片仮名にほぼ統一され」ているとした。⁽¹⁾

いっぽう〈池〉の基礎的研究と紹介した石田善人氏は、「〈建〉の」振り仮名には片仮名と平仮名の両様があり、片仮名は牛一の筆跡、平仮名は別人の筆跡」としたうえで、平仮名振仮名は巻十一の途中(天正六年二月九日の記事)までで、それ以後は片仮名振仮名のみになると指摘する。⁽²⁾ また平仮名振仮名の筆者は確定できないものの、書体から江戸初期に書かれたと推測している。ここで初めて片仮名振仮名が牛一自筆であるとされた。この見解は、やはり『信長記』諸本の異同に注目し、自筆本の調査をおこなった藤本正行氏にも継承されている。⁽³⁾ 以降の研究において、右の見解に異を唱える説はみられない。

以上より、〈建〉の片仮名振仮名は牛一自筆であること、〈建〉巻十一までは片仮名・平仮名の振仮名が混在していること、の二点が現在の

『信長記』研究における共通見解となっているとみなすことができる。

(2) 片仮名振仮名は牛一自筆か

ただし、石田氏が〈建〉の片仮名振仮名を牛一自筆と判断した根拠は明らかではない。おそらく〈池〉〈建〉二種の自筆本を熟覧したうえで、片仮名振仮名を本文と同筆とみたのであろう。つまりは筆跡が根拠となっていると思われる。

本稿では別の視点から、片仮名振仮名が牛一自筆かどうかという問題に近づいてみたい。検証にあたり、『信長記』十五巻および自筆本の存する牛一著作に付された振仮名をすべて抽出した表を作成した。前者は表1(巻ごとに1~15の枝番を付す)とした(稿末)。後者は紙幅の都合で割愛し、用例は著作名を典拠として挙げるにとどめた。⁽⁴⁾ 表の見方は表1冒頭に付した凡例を参照されたい。以下振仮名の事例を挙げるときはこの表の番号を示す。

さて、最初に注目するのは同じ字に片仮名・平仮名両方の振仮名が付されている事例である。巻一の「義昭」の「昭」(表1-1の1)、「恩顧」の「顧」(表1-1の2)、「乗込」の「込」(表1-1の8)巻六の「櫓」(表1-6の4)がある。これらは片仮名の右(もしくは下)に平仮名が記されているので、もともと片仮名があったところに同じ読みの平仮名を書いたことになる。

〈建〉では、すでに片仮名振仮名がある字に対して、通常平仮名振仮名は付されない。両方ある事例は右にあげた数例にとどまるが、これにより、少なくとも片仮名と平仮名の振仮名は別々の筆者によるものだと考えてよからう。自分で片仮名の振仮名を書いたあとから、わざわざ平仮名の振仮名を書きくわえる必要はないだろうからである。

次に、『信長記』にみられる片仮名振仮名と、他の牛一著作にみられるその共通性に注目したい。まずは多用される言い回しに付された振

仮名である。振仮名は（ ）内に示した。以下の説明で触れる用例については『日本国語大辞典第二版』（以下『日国』と略す）および中世後期から近世初期に成立したとされている古辞書を参照した。⁵⁾

①「噓」（ドツ）『信長記』表1-3の29、4の4、5の2、6の6、7の10、8の85・99、9の29、10の18、12の43／『豊国大明神臨時御祭礼記録』天理本・『太田和泉守記』

②「分而」（ワカツテ）『信長記』表1-2の9、10の14、11の115、12の6・17／『豊国』天理本他

③「塞」（ツマリ／フサガリ／フセキ／フセカセ）『信長記』表1-3の6、8の135、9の33、11の56・107、12の18、13の36、14の56／『豊国』完存本

③には複数の読みがあり、振仮名がないと誤読される可能性があるため付されたものか。次に、用例は少ないものの、特徴的な言い回しに付された振仮名の例である。

④「略」（コシボネ／コシホネ）『信長記』表1-1の10／『別本御代々軍記』（太田牛一旧記）

⑤「撥当」（アタリヲハラツテ）『信長記』表1-10の40、〈池〉表1-14／『豊国』完存本

⑥「下下」（タタタ）（ヨリクタリ／ヨリクタツテ）『信長記』表1-3の18、11の25／『太田和泉守記』

④の場合、『色葉字類抄』『温故知新書』『恵空編輯用集大全』『倭玉篇』においてコシホネの訓をあてるのは、旁にうかんむりをくわえた「略」の字である。牛一もこの字を書くつもりでの誤字だろうか。⑤は、この慣用句自体は以前からあるものの、この表記で「アタリヲハラウ」と読ませる事例は管見に触れない。ちなみに返り点を入れず「撥当」と書くと、「ばちあたり」と読ませる。

逆に、振仮名を付さずとも読めるような語句でありながら、あえて振仮名を付す語をひとつ挙げる。③の「塞」同様、読み方に注意をうながすものである。

⑦「込」（コミ／コム）『信長記』表1-1の8、4の1、11の50、15の71／『別本御代々軍記』・『豊国』完存本他

以上傍証とはなるが、特徴的な言い回しや、頻用される語句に対する片仮名振仮名について、他の著作に付されたものと共通していることを勘案すれば、やはり『信長記』における片仮名振仮名は牛一自身が付したと考えたい。

（3）〈建〉写本二種の振仮名の精度

自筆本における片仮名振仮名が牛一自筆だとして、表1にまとめた〈建〉十五巻の振仮名の数と、その写本である〈陽〉〈織〉の同一箇所が付された振仮名の数を比較したのが表2である。もとより振仮名が付された語については、厳密な一字単位ではなく、まとまった意味を示す単語や文節ごとに筆者が恣意的に区切ったものなので、数値は絶対的ではない。ただし自筆本とその写本を比較するうえで問題はないと考える。

表2を見てわかるように、〈織〉が二箇所落としただけでほぼ完璧に原本の片仮名振仮名を写しているのに対し、〈陽〉は半分強程度を写すにすぎない。振仮名という点においては、〈織〉が原本をより正確に反映しているとみなすことができよう。

ここで注意したいのは、〈陽〉の振仮名の書写率が巻十一以降高くなっていることである。石田氏が指摘したように、この巻十一の途中から〈建〉の平仮名振仮名がなくなる。表1-11でその境目を示したが、そこからわかるように、平仮名振仮名がなくなって以降、片仮名振仮名が写される割合が高くなる。

〈建〉では、いわゆる「総ルビ」に見紛うほど付されていた平仮名振

表2 建勲神社本・陽明文庫本・織田家本の振仮名の数

	建	陽	%	織	%
卷1	14	7	50.0	14	100
卷2	12	2	16.7	12	100
卷3	34	12	35.3	34	100
卷4	15	4	26.7	15	100
卷5	14	2	14.3	14	100
卷6	27	9	33.3	27	100
卷7	16	6	37.5	16	100
卷8	183	30	16.4	183	100
卷9	95	9	9.5	95	100
卷10	86	31	36.0	86	100
卷11	116	78	67.2	116	100
卷12	110	93	84.5	110	100
卷13	57	56	98.2	55	96.5
卷14	69	67	97.1	69	100
卷15	89	85	95.5	89	100
	938	491	52.3	936	99.8

※表1の△も○と同じ扱いにした。

仮名に、数としては圧倒的に少ない片仮名振仮名が埋もれてしまい、〈陽〉の写本作成時に見逃されたのだろうか。〈織〉は平仮名振仮名まで一緒に写していることもあり、片仮名振仮名もほぼ忠実に写されたといえそうである。あるいは、書写の方針と深く関わる理由が別にあるのかもしれない。しかし今のところ別の理由には思いあたらない。

仮に右のように考えてよいとすれば、〈建〉の平仮名振仮名は、〈陽〉書写時点ですでに存したことになる。石田氏は江戸前期の筆と推測しており、矛盾はしない。

三 「首巻」の振仮名

〈建〉およびその直接の写本である〈陽〉〈織〉の振仮名をめぐる前章での検討をふまえ、本章では「首巻」の振仮名について検討する。

首巻とは、信長が義昭とともに上洛する以前、つまり『信長記』巻一以前の信長の事跡を叙述した著作であり、内題には「是ハ信長公御入洛無以前の双紙也」とある。これを首巻としたのは角川文庫版だと思わ

れ、以降この呼称が一般に定着している。本稿でも以下便宜的に首巻と呼ぶことにする。

さて、『別本御代々軍記』の奥書および〈建〉の跋によると、元禄五年以前に十五巻を入手したあと、長清は同年春に太田牛一の孫にあたる牛輝（摂津麻田藩青木家の家臣）と面会し、乞うて別の牛一自筆本（牛一手沢自録泰巖公事旧記）「牛一手筆泰岩事旧記」を譲渡された。これが首巻（の原本）にあたりと考えられる。いまこの自筆本の伝存は確認されず、十五巻の写本と一緒に作成されたとみられる写本が、陽明文庫と織田家に伝来している。

首巻にも十五巻同様片仮名の振仮名が確認される。それをまとめたのが表3である（稿末）。前章同様、これら振仮名が牛一自身によるものと考えてよいのか、まずは検証したい。十五巻や他の牛一著作にみえる振仮名と比較する。

⑧ 「忍」（タマル／タマリ）表3の27／『内府公軍記』

この字に関わるふたつの用例は「不可忍」（タマルーベカラズ）、「不得忍」（タマリーラエズ）という文脈のなかで登場するので、こらえるという意味の「堪」に通ずる表記と考えられる。古辞書では『温故知新书』に「不忍」で「タマラズ」と読ませる例を確認したのみである。

⑨ 「一」（一々）（ツクツク）表3の55／表1-13の15

いずれも「ご覧」という信長の動作につながる。古辞書では『弘治二 年本節用集』『運歩色葉集』『恵空編節用集大全』に確認される。

⑩ 「生か城」（生にハダカ）表3の20・73／表1-11の39、12の64

おそらく右の表記で「ハダカジロ」と読ませるのだろう。「城下町を焼かれ、孤立した城」「櫓や塀など防御の備えを失った城」の意だが、「ハダカ」の読みに「生」を当てる用例は古辞書に見いだせなかった。

⑧から⑩のような特殊な和語の当て字とは逆に、ごく一般に通用する

と思われる字に、その語の音読みをあえて付しているのが、次の⑪である。

⑪「堀柵」(ヘイサク) 表3の22/表1-12の20・36・92

首巻は牛一自筆本が残っていないため、筆跡による判断はできない。しかし、右の四例のように、十五巻や他の著作にみられる振仮名と共通するものが確認できるため、写本にある片仮名振仮名は、書写時点で書写者が書きくわえたものではない(自筆原本に存した)と考えてよからう。

以上の確認のうえで表3に示した〈陽〉〈織〉の振仮名の差異をみると、〈織〉にある振仮名七十七箇所(平仮名振仮名一箇所を含む)のうち、〈陽〉には七十二箇所(うち仮名遣いの異同は四箇所)あり、逆に〈陽〉にあつて〈織〉にない振仮名はないことがわかる。十五巻における振仮名書写の精度もあわせ考えれば、首巻自筆原本にあつたであろう振仮名をより忠実に伝えているのは〈織〉である可能性が高いといえよう。⁽⁶⁾

四 池田家本の振仮名

ここでは池田家本(〈池〉)に付された振仮名について検討する。

石田氏の研究によれば、〈池〉は、牛一が慶長十五年(一六一〇)二月に池田輝政に献上した自筆本である。輝政や彼の父恒興・兄元助ら関係者に関わる事跡を元の本に加筆修正した本として知られている。石田氏が想定した輝政への献上の経緯は次のとおりである。

(一)輝政が自身の初陣の功名が記される巻十三を牛一に乞い、牛一は手元にあつたかつての清書本に慶長十五年二月の奥書を書きくわえて献上した、(二)それを読んだ輝政は他の巻も所望するに至つた。そこで牛一は手元になかつた巻一のみ新たに執筆し、他は手元にあつたかつて

表4 建勲神社本と池田家本・太田家本の振仮名

	建の振仮名	左の内池にある数	%	池の振仮名	太の振仮名
巻1	14	7	50.0	24	2
巻2	12	2	16.7	8	2
巻3	34	8	23.5	12	2
巻4	15	5	33.3	8	1
巻5	14	1	7.1	3	2
巻6	27	7	25.9	7	4
巻7	16	6	37.5	10	8
巻8	184	14	7.6	15	8
巻9	95	7	7.4	10	2
巻10	86	10	11.6	11	3
巻11	116	10	8.6	16	3
巻12	110	1	0.9	2	4
巻13	57	15	26.3	17	13
巻14	69	21	30.4	39	3
巻15	89	19	21.3	25	5
	938	133	14.2	207	57

ての清書本に奥書を書くわえて献上した。⁽⁷⁾(三)牛一は巻十三以外の巻の献上時、本文の擦消修正や加筆などを施した(振仮名もくわえられた)。表1-1から15には〈池〉の振仮名の有無も示した。その数を集計したのが表4である。これを見ると、〈池〉は〈建〉とくらべて圧倒的に振仮名が少ないことがわかるだろう。

このなかで注目されるのは巻一である。〈建〉に付されておらず、〈池〉のみに付された振仮名が十五箇所あるのである。いま触れたように巻一は、慶長十五年に輝政への献上という目的のもと新たに執筆されたものであつた。つまり、明確に献上相手を想定したうえで執筆された本に対する振仮名の多さ、を指摘できる。

ところで、牛一の著作である秀吉の記録『大かうさまくんきのうち』の本文を検討した矢部健太郎氏に、同書の振仮名をめぐる興味深い指摘

がある。⁽⁸⁾

矢部氏は、①読みが難しい語句、②読み間違いを避けるべき語句、③読みの可能性が複数想定される語句、に振仮名が付されているとし、とくに③から、この著作は黙読でなく音読のため、高貴な女性が音読して誰かに聞かせるために執筆されたと推測した。読み手が明確に想定され執筆された著作の振仮名を考えるうえで示唆に富む。

そこで注目したいのは、『永禄十一年記』と呼ばれる本である。これは十五巻の巻一のみだけを執筆し、巻子仕立てにした独立の本で、巻尾に「古志宮内少輔殿」の宛名と「太田又助(花押)」の署判がある。文字の書きぶりと「又助」の通称(牛一は後年和泉守と名乗る)から、比較的早い時期に書かれたと推測されている自筆本である。

そこに付された振仮名も表1-1-1中に示した。同じ本文(用字の異同も含む)で〈建〉にない振仮名が四十三箇所も存する。これまた古志宮内少輔という人物に対する献上本ということを考えれば、〈池〉巻一とあわせ、牛一自筆本の振仮名は、献上相手を強く意識している場合に付されることが多いと考えられよう。この場合の献上は、相手が読むということを念頭に置いていると言つてよい。つまり読み手を強く想定している場合に振仮名が多く付されるのである。こうした振仮名の性質は、日本語学者の今野真二氏が指摘している。⁽⁹⁾

逆にいえば、〈池〉のうち巻一以外の巻は振仮名が少ないため、もともと牛一の手元に置かれ、献上することが想定されていない、手控えに近い自筆本であると考えられる。

それを考えるとさらに興味深いのは、『信長記』の写本のひとつ、牛一末裔の太田家(「信長公御入洛無以前の双紙」を元禄五年に長清に譲渡した牛輝の家)に残された写本である。以前筆者はこの写本について、本文は〈建〉に近いが、〈池〉の擦り消された部分を復原できる箇

所があるから、〈池〉と〈建〉の中間に位置するものと考えた。

太田家本の振仮名数についても表4に示している。それによれば、振仮名の数は〈池〉よりさらに少ない。ここから、太田家本(の原本にあたる牛一自筆本)は、手元本としての性格がより強いものではなかったのかと推測されるのである。太田家に伝来していることも裏づけとなる。

五 牛一著作と振仮名―むすびにかえて

以上、『信長記』自筆本に付された振仮名を検討してきた。写本しか残っていない首巻について、振仮名の点では〈織〉のほうが原本をより忠実に反映している可能性が高いこと、振仮名の多寡から、〈池〉が手控えの性格が強い本であることなどを指摘した。

もとより手控えといっても振仮名がないわけではない。ここまでの検討をふまえ、牛一はどういった場合に本文に振仮名を付したのかを考え、むすびにかえたい。

とはいえ、つまるところ前章で触れた矢部氏の指摘が『信長記』にもあてはまる。人名・地名のような読みに注意を要する固有名詞、また古典的な漢文を引用する部分が挙げられる。さらに特殊な読ませ方をさせようとする文字への振仮名である。いくつか事例を挙げてみる。⁽¹⁰⁾

⑫「余処」(シカツシトコロニ)表1-2の1、10の77

『日国』には「シカツシトコロ」の項目はあるが、『甫庵信長記』が用例として挙げられている。『甫庵信長記』の原拠は当然牛一の『信長記』だろう。

⑬「寒死」(コ、エシニ)表1-2の6、6の27、15の50

『日国』では「コゴエシニ」は「凍死」のみで、「寒死」をあてる用例は古辞書にも見いだされない。

⑭生便敷(ヲヒタ、シキ/ヲヒタ、シク)〈池〉表115、9の84、11の31・82、12の23、14の11・69、15の2

『信長記』では右のように多いが、古辞書では『前田家蔵古本下学集』のみ「ヲヒタ、シ」に「生便敷」の字をあてている。

⑮生足(スアシ)表116の18

「スアシ」に「生足」の字をあてる古辞書はなく、ほとんどが「跣」である。

以上からは、和語としては一般的であるが、ふつうは別の漢字をあて通用する語句に対し、牛一が異なる(独特の、もしくははめずらしい)表記を用いた語句に振仮名を付していることがわかる。そのままでは読めず、一般的な用字ではないからであろうが、ではなぜ一般的な表現を牛一は用いないのかは謎である。好みの問題、ということなのだろうか。

こうした特殊な読みせ方をする語句のほか、「被_レ負」の「負」にヲワセ(表119の26)、「討」にウタセ(10の19)、「被_レ攻」にセメサセラレ(10の28)、「退被_レ申」の「退」にノケ、「被_レ退候」の「退」にノカセ(15の88・89)など、そのまま読めば「ヲワ(レ)」「ウチ」「セメラレ」「ノケ(モウサレ)」「ノカ(レ候)」となる箇所に、振仮名により助動詞を補って読み方を示す場合もある。とりわけ「退」は近いところに連続して出てくるため、同じ字でも前者は「ノケ」で後者は「ノカセ」であることに注意するのだろう。先に挙げた用例③「塞」の振仮名に通じる。

矢部氏が『大かうさまくんきのうち』の検討で注目した漢字への濁点についても、『信長記』にもいくつか確認できる。「大田」(オオダ、表111の93)、「獵師川」(リョウジガワ、11の94)、「深田」(フカダ、巻12)、「大戸」(オオド、巻14)、「小原」(オハラ、巻15)、「不容」(イレズ、表115の32)、「世木」(セギ、巻15)、「言葉」(コトバ、同上)などで、ほか牛一著作にも数例見られる。これらは振仮名でこそないもの

の、漢字のみでは読みを精確に伝えられないと懸念した牛一による、読みに配慮するための補助記号だろうか。

興味深いのは、「たいらこへ」と本文が仮名書きになっている地名の「た」にわざわざ「ダ」と片仮名振仮名を付している箇所である(表118の134)。現代人たる筆者にとつては、たんに「た」に濁点を付せばすむ問題と考えてしまうが、本文の仮名には濁点は付けないという日本語表記上の原則(もしくは牛一の考え)でもあったのだろうか。

以上より、『信長記』の片仮名振仮名もまた、牛一が本文を精確に読んでほしい場合に付されたのであろうと考えられる。複数の自筆本が残るのは『信長記』に限らず、注(4)に示したようにいくつかある。これらに付された片仮名振仮名の多寡により、献上用か手元用かという新たな視点から諸本の性格を考えることができるかもしれない。問題提起のみで今後の課題とする。

〔注〕

- (1) 内藤昌「安土城の研究(上)」(『國華』九八七、一九七六年)。
- (2) 石田善人『信長記』の成立とその意義(岡本良一編『織田信長のすべて』新人物往来社、一九八〇年)。
- (3) 藤本正行『信長の戦争』信長公記に見る戦国軍事学(講談社学術文庫、二〇〇三年、初刊一九九三年)。

(4) 調査したのは下記史料。※印を付した一点のみ活字に拠り、他は影印本、所蔵機関が公開する高精細画像、史料編纂所データベースの影写本・謄写本・写真にて画像を確認した。『別本御代々軍記』(太田牛一旧記)：織田家所蔵自筆本・陽明文庫所蔵写本・木田家所蔵写本。『大かうさまくんきのうち』：慶應義塾図書館所蔵自筆本(慶應義塾大学付属研究所所蔵文庫編『大かうさまくんきのうち』汲古書院、一九七〇年)。「豊国大明神臨時御祭礼記録」：天理大学附属天理図書館所蔵自筆

本・京都豊国神社所蔵自筆完存本※・同自筆残欠本・大阪豊国神社所蔵自筆本。『内府公軍記』：大和文華館所蔵自筆本・名古屋市蓬左文庫所蔵自筆本（『太田和泉守記』）。『猪熊物語』：太田家所蔵自筆本（『今度之公家双紙』）・『太田牛一覚書』。詳細な書誌は拙著『織田信長という歴史』を参照されたい。

(5) 参照した古辞書は左記の通り。

中田祝夫・峯岸明編『色葉字類抄研究並びに索引 本文・索引編』風間書房、一九六四年

中田祝夫編『文明本節用集研究並びに索引』風間書房、一九七〇年

中田祝夫・根上剛士編『中世古辞書四種研究並びに総合索引』風間書房、一九七一年

中田祝夫・林義雄編『古本下学集七種研究並びに総合索引』風間書房、一九七一年。

中田祝夫編『印度本節用集古本四種並びに総合索引』風間書房、一九七四年

中田祝夫編『恵空編節用集大全研究並びに索引』勉誠社、一九七五年

(6) 〈陽〉は近衛家に献上されるにふさわしい装幀がなされ、文字も丁寧に写されている。次章にて論じる振仮名の目的を考えれば、振仮名を忠実に写していないという意味で、読ませるといふより、献上すること自体に書写の目的があったゆえと考えるべきだろうか。

(7) なお池田家本のなかで巻十二は成立・伝来の点で他巻と異なるとする石田氏の指摘があるが、ここでは触れない。

(8) 矢部健太郎「『大かうさまくんきのうち』の執筆目的と秀次事件」（金子拓編『信長記』と信長・秀吉の時代）勉誠出版、二〇二二年。なお『大かうさまくんきのうち』は、牛一著作のなかで唯一振仮名が平仮名で表記されている。

(9) 今野真二『振仮名の歴史』（岩波現代文庫、二〇二〇年、初刊二〇〇九年）。

(10) 以下⑫から⑮の四例については、史料編纂所のフルテキスト系データベースを検索するかぎり同様の用例は検出されなかった。

(11) 「寛仁」（豊国）天理本・大阪豊国本、「盲人」（豊国）天理本、「多賀」（内府公軍記）『太田和泉守記』など。また写本だが、首巻には「不斜」「加治村」「伊木山」「多治見」が確認される。

〔付記〕 本稿は左記科学研究費補助金による成果の一部である。

「信長記」諸本の史料学的研究」（基盤研究C、課題番号一九五二〇五五七、研究代表者金子、二〇〇九年度をもって終了）

「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展―知の体系の構造伝来の解明―」（基盤研究S、課題番号一七H〇六一一七、研究代表者田島公氏）

「撰家伝来史料群の研究資源化と伝統的公家文化の総合的研究」（基盤研究A、課題番号一七H〇〇九二六、研究代表者尾上陽介氏）

「戦国軍記・合戦図の史料学的研究」（基盤研究A、課題番号二〇H〇〇〇三一、研究代表者堀新氏）

【表一の見方】

一、『信長記』各巻の振仮名を抽出した表である。

二、各巻の登場順に右から並んでいる。

三、上の数字は〈建〉の登場順に付したものであり、同本の写本である

〈陽〉〈織〉の有無を○×で表示した。

四、振仮名のある語句の区切りは、金子の判断で一語単位、単語単位、文節単位と多様である。したがって各巻における振仮名のある語句数は恣意的である。

五、建勲項には、本文項にある語句に付された振仮名を順に挙げ、語の間にはスラッシュ（/）を入れた。他の振仮名の読みも同様である。

六、連続する単位でまとめた語句のうち、前後途中に振仮名を付していない語句がある場合、その語句は本文項において（ ）の中に入れた。

七、途中に振仮名を付していない語句の振仮名表記は、/ のようにス
 ラツシユの間にハイフン(一)でもって示した。
 八、写本が〈建〉と異なる振仮名を付している場合、各項に注記した。
 語の一部が異なる(たとえば濁点の有無)場合、異なる語をゴチツク
 体にした。

九、上に数字がない行の本文・振仮名は、〈建〉に振仮名が付されてお
 らず、他の参照した自筆本・写本に存するものであり、灰色で示した。
 十、九の場合、〈建〉に同様の語句があり、振仮名がないものには×
 を、本文そのものがない場合は「本文なし」、仮名書きになっている
 場合は「本文仮名書き」とした。

十一、〈建〉に振仮名がある語句に対し、〈池〉ほか参照した本での表記
 方法も十に準ずる。

表1-1 『信長記』巻一の振仮名

	本文	建勲	陽明	織田	永禄十一年記	池田	太田
濫賜	×	×			ランシヤツ	×	
遺恨	×	×			シツケン	×	
執権	×	×			イコン	×	
寄(事於左右)	×	×			ヨセ	×	
二(一)	×	×			クツシ	×	
終(に)	×	×			ツイ	×	
御(供)衆	×	×			トモ	×	
未若年	×	×			本文「未弱年」イマタ	×	
御(殺)し	×	×			本文「(きり)殺(し)」	×	
一(一)	×	×			本文「(きり)殺(し)」	×	
有(被申)	×	×			本文「有(申され)ナ	×	
潜	×	×			本文「有(申され)ナ	×	

	本文	建勲	陽明	織田	永禄十一年記	池田	太田
恩(願)忘(レ)ニ	コ		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
雨(漏)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
御(相伴)之次	ナミ		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
不(被)出(其)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
詞(一)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
隔(国)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
之(雖)為(厄)弱	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
之(士)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
輕(一)命(ヲ)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
助(助)功(ヲ)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
輕(一)命(ヲ)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
不(不)斜	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
御(行)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
頻(にて)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
御(行)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
休(息)暇	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
愛(智)川	エチ		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
並(兼)作(山)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
其(作)山(之)城	ミツクリ		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
者	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
被(進)御(馬)ヲ	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
被(進)御(馬)ヲ	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
桑(実)寺	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	
桂(川)	×		○	○	本文「忘(主従之恩願ヲ)	ヲンコ	

表1-3 『信長記』卷三の振仮名

28	27	26	25	24		23	22	21	20	19	18	17	16		15	14	13	12		11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
箕作(山)	百々	塞(〜)	抛筋力	香取	(雌)叫喚	(福麻竹)葦	昔年	接面	(其)旗	唾	纒	下々	僉儀	某者	(堤)通	戦而	遠里小野	百々	(浅井)齋	(口)削	龍(か鼻)	高坂	(堀)底	雲雀(山)	善住(坊)	塞(〜)	遣(され)	登(へ)	和迹	三輪	罫計	本文
ミツクリ	ドド	ツマリ	カネトリ	×	×	ソノノカミ	ソウシテ	ハタ	ドツ	ワツカ	ワリクタリ	センギ	ソレカシハ	×	タ、カツテ	ウリウノ	ドク	イツキ	×	タツ	コウザカ	ソコ	ヒバリ	ゼンチウ	ツマリ	ツカハ	ソビ	ワニ	ミハ	ノシ	建勲	
×	×	○	△(「筋力」に振仮名なし)	×		○	×	×	×	×	○	×	×		×	○	○	×	×	×	×	×	×	○	×	○	○	○	×	×	陽明	
○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	織田	
○	×		×	○		カク	×	×	×	×	×	×	×		トヨリ	○	○	○	ゲ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	池田		
○						サケプト/ラメキ																									太田	

表1-4 『信長記』卷四の振仮名

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6			5	4	3		2	1	
(御)局	走(入候也)	関音	遊(龍)	遊(上り)	為(「灰燼之地ト」)社	(可)被(散)其(御)憤(為)	隨(于時)	隨(于世)	不拘(作法ニモ)	苜(田)	志村	被(薄手ヲ)	唾(ト)	殿(疾廻)	多藝(山)	八幡	(懸)込	本文
ツホネ	ハシリ	トキノコエ	ニケ	ニケ	ナルイ/コン	タメ	シタカウ	ズカ、ワラ	×	×	カウムリ	ドツ	シツハラ	×	ヤフタ	コミ		建勲
×	×	○	×	×	○	×	×	×	×		×	×	○	○	○	○	×	陽明
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	織田
○	○	○	○	×	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	池田
																		太田

34	33	32	31	30	29	
(被)引退	居初	(御手)塞	輒(様ニ)	鉄綱	唾(ト)	本文
ノケ	イソメ	フサカリ	タヤスキ	カナツナ	ドツ	建勲
×	○	×	○	○	×	陽明
○	○	○	○	○	○	織田
×	×	×	○	○	×	池田
			○			太田

表1-5 『信長記』 卷五の振仮名

14	射倒(し)	イ/タラ	×	○	○	×			
13	成瀬(藤蔵)	ナル/セ	×	○	○	×	×	×	
12	先(懸)	サキ	×		○	×	×	×	
11	(其)緑	本文仮名書き							本文仮名書き
10	宮部	ミヤノ/ベ	×	○	○	×	×	×	
9	(其)繫(として)	ツナギ	×	○	○	×	×	×	
8	(御)憤	イキト/ヲリ	×	○	○	×	×	×	
7	為(灰燼ト)	ナル	×						ヲ/ヒタ/シ/キ
6	生便敷	×	×						
5	(不)聞	キカズ	×	○	○	×	×	×	
4	塩津(浦)	シラ/ツ	×	○	○	×	○	○	平仮名
3	團(舟)	カコイ	×	○	○	×	×	×	
2	(打)下	ヲロシ	×	○	○	×	×	×	○
1	襲(ハセ)	ヨソ	×	○	○	×	×	×	
	唾	ドツ	×						
	交(野)	カタ	×						○(野にもノの振仮名)
	鉦(桶)	×	×						
	本文	建敷		陽明	織田	池田	太田		

表1-6 『信長記』 卷六の振仮名

11	(草木も)靡(計)	ナビク	×	○	○	×			
10	被(届)	ト/ケ	×	○	○	×	×	×	
9	怨(をは)	アタ	×	○	○	×	×	×	
8	唾(と)	ドツ	×	○	○	×	×	×	
7	関音	トキノ/コエ	×	○	○	×	×	×	トキノ/コエ
6	唾(と)	ドツ	×	○	○	×	×	×	
5	轆軸	トモ/ヘ	×	○	○	×	×	×	トモのみ
4	橋	ロ	×	○	○	×	×	×	
3	灰燼	クワイ/シン	×	○	○	×	×	×	
2	(御手)塞	フサガリ	×	○	○	×	×	×	フサカリ
1	薬研	ヤ/ゲン	×	○	○	×	×	×	○
	本文	建敷		陽明	織田	池田	太田		

表1-7 『信長記』 卷七の振仮名

27	寒死	ココロ/シニ	×	○	○	×			
26	射倒	イタ/ヲシ	×	○	○	×	×	×	
25	静(原)	シツ	×	○	○	×	×	×	
24	白山之	シラ/ヤマノ	×	○	○	×	×	×	×本文「しら山之」
23	(御)憤	イキト/ヲリ	×	○	○	×	×	×	
22	鋸(にて)	ノ/コキリ	×	○	○	×	×	×	
21	上(せ)	ノ	×	○	○	×	×	×	ノホ
20	上(せ)	ノ	×	○	○	×	×	×	
19	括縛	ク、リ/シバリ	×	○	○	×	×	×	×本文なし
18	生足	スアシ	×	○	○	×	×	×	×本文「す足」
17	(志津か)高	ダケ	×	○	○	×	×	×	×本文仮名書き
16	田上(山)	タノ/ガミ	×	○	○	×	×	×	×本文仮名書き
15	塞(戦)	フセキ	×	○	○	×	×	×	×本文仮名書き
14	区々	マチノ	×	○	○	×	×	×	
13	道復	タウノ/フク	×	○	○	×	×	×	
12	團(前後)	カコミ	×	○	○	×	×	×	
	本文	建敷		陽明	織田	池田	太田		

10	唾(と)	ドツ	×	○	○	×			
9	持披	モチ/アツカイ	×	○	○	×	×	×	
8	本(とせず)	×	×	○	○	×	×	×	×
7	走(かし)	ハシラ	×	○	○	×	×	×	
6	一番	ヒトツ/ガイ	×	○	○	×	×	×	ヒトツカヒ
5	黒(装束)	クロ	×	○	○	×	×	×	
4	十番	×	×	○	○	×	×	×	トツカヒ
3	高野	カウノ	×	○	○	×	×	×	かうの
2	薄濃	ハクノ/タミ	×	○	○	×	×	×	
1	(朝倉左京大夫義景)首	カウベ	×	○	○	×	×	×	○
	本文	建敷		陽明	織田	池田	太田		

表 1-8 『信長記』 卷八の振仮名

20	拳十指	アケシジツシ	×	○	×		
19	草卑	ソシヒ	×	○	×		
18	烟戸	カマトト	○	○	×		
17	黎民	レイミン	○	○	×		
16	成往還	ナシワウタハン	×	○	×	ヲタヤカ	
15	穩便	ユダヤカ	○	○		ヲタヤカ	
14	牛馬之	ギウバノ	×	○	×		
13	難所之忘 苦勞	ナンシヨノノラス レクシラウ	×	○	×		
12	聊以	イサ、カモツテ	×	○	×		
11	路次之滯	ロシシノト、コラ	×	○	×		
10	所以	ユハヤモツテ	○	○	×		
9	致掃除	イタシソウヂ	×	○	×		
8	払微塵	ハライミヂン	△「払」になし	○	×		
7	濺(水)	ソ、キ	ソソギ	○	×		
6	植置	ウエオキ	×	○	×		
5	退(テ)	ノケ	×	○	×		
4	驗路	ケンロ	×	○	×		
3	舟橋	フネハシ	×	○	×		
2	江川	エカハ	×	○	×		
1	(御)触	フレ	×	○	×		太田
	本文	建勲	陽明	織田	池田		

16	迹(人)	ニゲ	×	○	×		
15	被切濲	本文「切ひてられ」		○		ラレキリヒテ	
14	(爲)懲	コラシメノ	×	○	×		
13	堀槽	ヘイヤクラ	×	○	×		
12	推(之手)	ヲサエ	×	○	×	×本文「押之手」	
11	迹(入)	ニゲ	×	○	×		
	榑水	×	×	○	×		タルミ
	熱田	アツタ	×	○	×		
	蟹江	×	×	○	×		カニハ
	本文	建勲	陽明	織田	池田		太田

51	誅(させられ)	チウ	×	○	×		
50	繩(懸り)	ナワ	×	○	×		
49	生捕	イケトリ	×	○	×		
48	然而	シカルニ	×	○	×		
47	被(攻サセ)	ラレ	×	○	×		
46	壇草	ウメクサ	△「草」になし	○	×	×本文「うめ草」	
45	射(入)	イ	×	○	×		
44	拵	コシラヘ	×	○	×		
43	驚(耳目)	ヲドロカスジモク	×	○	×		
42	都鄙之貴賤	トビノキセン	×	○	×		
41	雜捨	ナギノステ	×	○	×		
40	麦苗雞(捨)	ムギナエナギ	×	○	×		「雞」のみナキあり
39	塙(九郎左衛門)	ハノウ	×	○	×		
38	誉田	コンタ	△「田」になし	○	×		
37	晴(かましき)	ハレ	×	○	×		
36	被(統)	カウムリキズラ	×	○	×		
35	八幡	ヤワタ	×	○	×		
34	被(召列)	ラレメシツレ	×	○	×		
33	菅(九郎)	カン	×	○	×		
32	騎男	チヤクナン	×	○	×	本文なし	
31	被(還附(七))	ラレゲンフ	△「被」になし	○	×		
30	沽却	コノキヤク	○	○	×		
29	怠転	タイテン	×	○	×		
28	御變壞	コノハイエ	×	○	×		
27	鞠	マリ	×	○	×		
26	(今川)氏実	ウヂサネ	×	○	×		
25	存之而已	ゾスルコレヲノミ	×	○	×		
24	奇(須達)	ダツ	△「達」になし	○	×		
23	福者	サイワイハ	×	○	×		
22	同(シク)朔母	ヲナサクノボ	×	○	×		
21	御齡者	ランヨワイハ	×	○	×		
	本文	建勲	陽明	織田	池田		太田

80	廻(り)	マワ	×	○	本文仮名書き	
79	召列	メシツレ	×	○		
78	不破損	サルハソんゼ	×	○		
77	与天所(候間)	アタウルテソノト	×	○		
76	(打向)備	ソナヘ	×	○		
75	小幡	ヲバタ	×	○		
74	踏(出し)	フミ	×	○		
73	瀧澤(川)	タキサハ	×	○		
72	鳶(の)巢	トビノス	×	○	×本文「鳶」 仮名書き	
71	瀧澤(川)	タキサワ	×	○		
70	深山	シンサン	×	○		
69	鳶(の)巢	トビノス	×	○	×本文「鳶」 仮名書き	
68	太山	タイサン	×	○		
67	(馬)防之為備(ヲ)	フセキノノタメサ	×	○		
66	被備	ラレソナヘ	×	○	×本文「被」 仮名書き	
65	新御堂山	ニイミドウヤマ	り△「新」のみあ	○		
64	志多羅之郷	シタラノコウ	×	○		
63	牛窪	ウシクボ	×	○		
62	癡壊	ハイエ	×	○		
61	(八)観宮	ケンクウ	×	○		
60	昔(九郎)	カン	×	○	本文なし	
59	嫡男	チヤクナン	×	○	本文なし	
58	破却	ハキヤク	×	○		
57	塙(九郎左衛門)	ハノウ	×	○		
56	東村備後	ヒカシムラヒン	×	○		
55	東村(大和)	ヒカシムラ	×	○		
54	十河(越中)	ソノカウ	×	○		
53	十河因幡	ソノカウイナバ	×	○	り△「十」のみあ	
52	香西(越後)	カウサイ	×	○		
	本文	建敷	陽明	織田	池田	太田

111	推車輪(也)	コレシヤリン	×	○		
110	御武者	ヲンブトクハ	×	○		
109	宛如三照日(輝)	アタカコトクテル ヒシカ、ヤキケ スカチヨウロラ	り△「宛」のみあ	○		
108	武勇之達者	ブユウノタツシ	×	○		
107	被破損強敵様	ラレハソんセコ ウチヲタメシ	り△「様」のみあ	○		
106	無恙	ナクツハカ	×	○		
105	開愁眉	ヒラキシウビヤ	×	○		
104	競(に)	キライ	×	○		
103	溺(れ)	ヲボ	×	○	本文仮名書き	
102	飢死	ウヘシニ	×	○		
101	逃上	ニゲノボリ	×	○		
100	高坂(又八郎)	コウサカ	×	○		
99	噓(と)	ドツ	×	○		
98	旗(元)	ハタ	×	○		
97	人数(を)備	ニンジユイソナヘ	×	○		
96	推太鼓	ヲシタイコ	×	○		
95	祢(り)倒(され)	ネリタラ	×	○		
94	(足軽にて)会釈	アイシライ	○	○	本文仮名書き	
93	一党	イツトウ	×	○		
92	(打)倒(され)	タラ	×	○		
91	推太鼓	ヲシタイコ	×	○		
90	塙(九郎左衛門)	ハノウ	×	○		
89	野々村(三十郎)	ノノムラ	×	○		
88	癡忘	ハイマウ	×	○		
87	忽運(ヲ開き)	タチマチウン	×	○		
86	責(乘)	セメ	×	○		
85	噓(はなち)	ドツト	×	○		
84	凱声	トキノコエ	トキノコエ	○		
83	推立	ヲシタテ	×	○		
82	旗首	ハタカシラ	×	○		
81	鳶(の)巢	トビノス	×	○		
	本文	建敷	陽明	織田	池田	太田

141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112			
向駿河	(頭を)斬	(御)赦(免)	潰胆	火燧(城)	鉢伏	塞(へ)	た(いらこへ)	潜水	(落合を)間切	火燧(か城)	鉢伏(之城)	下間(和泉)	虎杖(之城)	(御)棧敷	秋後(にハ)	情(を)	不飢死(様に)	男女	山中之宿	頑者	先祖之者	(依)其因果	常磐(御前)	頑者	(打)続	(為)本意(業)	甲冑	栖(として)	被(欲)揚(御名ヲ後代)ニ	本文		
ムカイ(スル)カ	キリ	シヤ	ツフシ(キモヲ)	ヒウチ	ハチ(フセ)	ツマリ	ダ	タ、へ(ミツヲ)	セキ(キリ)	ヒウチ	ハチ(フセ)	シモツ(マ)	イタ(ドリ)	サジキ	シウゴ	ナサケ	ザル(ウヘシナ)	ナン(ニヨ)	ヤ(マ)ナカ(ノシユ)	カタ(ハ)モノ	セン(ソノ)モノ	ソノイン(クワニ)	トキ(ハ)	カタ(ハ)モノ	ツ、キ	ゲウ	カツ(チウ)	スマカ	ラレ(ホツセ)アゲン	建勲		
し△「駿河」にな	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	揚(名)ニントの送り	陽明	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	サル(ウヘ)シナ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ラレ(ホツセ)アゲン	織田	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	池田	
																																太田

171	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142			
水精山	支	猿狖(甚太郎)	水精山	数寄(仕候者)	葉茶壺	(小玉)櫃	清水(にて)	清水(へ御成)	菅(小太郎)	陸(を)	開(前後)	足羽山	執固	洩矢	(打)下	繩張(させられ)	檜屋城	能美郡	小黒(ノ)	記(ス)	(尋)搜而	(不)取敢	斬(捨)	斬捨(られ)	貴破	鳥羽之城	消胆	向(駿河)	山内(源右衛門)	金子(新丞)	本文		
スイシヤウ(サン)	サ、へ	サラウギ	スイシヤウ(サン)	ス、キ	ハ(チャ)ツポ	×	キヨ(ミツ)	キヨ(ミツ)	カン(ノ)	タガ	カコミ	ア(スカ)ヤマ	トリ(カタメ)	サビヤ	ヲロシ	ナワ(ハリ)	ヒ(ノ)ヤ(ノ)シヤウ	ヨ(ネ)ノ(コ)ホリ	ノ(ミノ)ノ(コ)ホリ	ヲ(ク)ロ	シル	サ(ク)ツ(テ)	トリ(ア)ヘ	キリ	キリ(ステ)	セ(メ)ヤ(フリ)	ト(バ)ノ(ジヤウ)	ケ(シ)キ(モヲ)	ム(カイ)	ヤ(マ)ノ(ウチ)	カ(ネ)ノ(コ)	建勲	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	△(「城」になし)	△(「郡」になし)	△(「郡」になし)	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	陽明
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	織田
×	×	×	×	×	×	カン	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	池田	
											○																						太田

表119 『信長記』卷九の振仮名

15	塙(喜三郎)	ハノフ	×	○	×	太田
14	請止	ウケノトメ	×	○	×	太田
13	被差遣	サレサシツカハ	×	○	×	太田
12	止(候間)	トマリ	×	○	×	太田
11	通路	ツウノロ	×	○	×	太田
10	尼崎	アマカサキ	×	○	×	太田
9	上(方)	カミ	×	○	×	太田
8	幸空間地(二冊)	サイワイアキチ	△「幸」になし	○	×	太田
7	秋田城介	アイタシヤウノスケ	×	○	×	太田
6	輓	×	×	○	×	太田
5	助勢	スケセイ	×	○	×	太田
4	勝(たる)	スケ	×	○	×	太田
3	虻石	ジャノイシ	×	○	×	太田
2	撰(取)	エラミ	×	○	×	太田
1	(奈良野)之	ノ	×	○	×	太田
	御津(寺)	ミンツ	○	○	×	太田
	本文	建敷	陽明	織田	池田	太田

183	鏝(金銀)	チリハメ	×	○	×	太田
182	秋田城介	アイタノシヤウノスケ	×	○	×	太田
181	張(付)	ハリ	×	○	×	太田
180	長良之(河原)	ナガシラノ	×	○	×	太田
179	岐阜	ギフ	×	○	×	太田
178	(御)赦免	シヤメン	×	○	×	太田
177	座光寺	ザクワウジ	×	○	×	太田
176	塙(伝三郎)	ハノウ	×	○	×	太田
175	塚本(小大膳)	ツカモト	×	○	×	太田
174	(御)扶	タスケ	×	○	×	太田
173	地筋力	ナケウツチキンリ	△「筋力」にな	○	×	太田
172	斬捨	キリステ	×	○	×	太田
	本文	建敷	陽明	織田	池田	太田

47	尼崎小畑	アマカサキノコバタケ	×	○	×	太田
46	沼野(大隅守)	ヌマノ	×	○	×	太田
45	沼野(伊賀)	ヌマノ	×	○	×	太田
44	沼野(伝内)	ヌマノ	×	○	×	太田
43	七五三(兵衛)	シメノ	×	○	×	太田
42	催	モヨラシ	×	○	×	太田
41	(七八百)艘	ソウ	△「屋」になし	○	×	太田
40	粟屋	アラヤ	×	○	×	太田
39	児玉	コタマ	×	○	×	太田
38	来嶋	クルシマ	×	○	×	太田
37	能嶋	ノシマ	×	○	×	太田
	(大)軸(之総)	×	×	○	×	太田
36	沼野(伝内)	ヌマノ	×	○	×	太田
35	七五三(兵衛)	シメノヒヤウヘ	×	○	×	太田
34	拵	コシラヘ	×	○	×	太田
33	塞()	ツマリ	×	○	×	太田
32	被備	ラレソナヘ	×	○	×	太田
31	立固	タテカタメ	×	○	×	太田
30	(懸)崩	クツシ	×	○	×	太田
29	唾(懸り)	ドツト	×	○	×	太田
28	(如)降雨	フルアメノ	×	○	×	太田
27	(不)苦	クルシカラ	△カラは送り仮名としてあり	○	×	太田
26	(被)負	ヨワセ	×	○	×	太田
25	(三段御)備	ソナヘ	×	○	×	太田
24	推(を仕候はん)	ヨサヘ	×	○	×	太田
23	(御)備	ソナヘ	×	○	×	太田
22	(被)打向	ムカハセ	×	○	×	太田
21	(不相)続	ツマカ	×	○	×	太田
20	(不相)調	トノワ	×	○	×	太田
19	織	ワツカ	×	○	×	太田
18	明衣	ユカタビラ	○	○	×	太田
17	枕(を)並	マクラナラベ	×	○	×	太田
16	蓑浦(無右衛門)	ミノウラ	×	○	×	太田
	本文	建敷	陽明	織田	池田	太田

80	89	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61		60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48		
噓(し)	平(へ)	比叡之(大)高	(比良の)嶽	音信(レテ)	暁夕	巖	登(へ)	巖々(ト)	湖之	漫(々)	(光)輝	麓(者)	(漆)脚頭	(黒)漆	着(せざせられ)	(惣)漆(にて)	内外	黒漆	狭間戸鉄(也)	(高)欄撥法珠	榻(所)	呂洞賓	拵(申所也)	(三て)布	儒(者)	(十二畳)布	(鵜)之間	(布)着	投(入)	(敷)刻(之)職(也)	浜(手)	競(出)	陸(者)	本文	
タトヘ	ハイ	ヒエノイダケ	ダケ	ヲトツ	ゲウノセキ	イワラ	ソビヘ	カノカ	ミツウミノ	マン	カ、ヤキ	フモト	カシラ	シツ	キ	ウルシ	ウチノソト	コクシチ	サノマトケロカネ	×本文「高欄きほうし」	カベル	リヨトウノベン	コシラハ	シキ	ジュ	シキ	ガ	ナゲ	タ、カイ	ハマ	キライ	クガ	建勲		
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	△「鉄」になし		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	陽明
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	カヘル	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	織田
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△「狭」にセのみ	ランノキホウノシン	×	×	×	×	×	×	×	ナケ(左に振仮名)	×	×	×	×	×	池田	
																																			太田

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
分而	浜手	雑賀	頭	討捕	退後(之者)	可被(攻)干	貝塚	(海手を)拘	貝塚	凌(風雨ヲ)	(被)召具	三藏之	雑賀	本文	
ワカツテ	ハマテ	サイカ	クビ	ウチトリ	ノキヲクレ	ヘキル(セメ)ホサ	カイツカ	カ、ヘ	カイツカ	シノキ	メシゲ	ミカラミノ	サイカ	建勲	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△「之」になし	×	陽明	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	織田	
×	×	×	×	×	×	×本文「可被攻」	×	×	×	×	×本文「被召列」	×本文仮名書き	×	池田	
												※		太田	

表1-10 『信長記』巻十の振仮名

95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81		
陸(を)	(被)作置	希(有)之	矢毘	節(もなき)	壺	被移(花落)	快	(瑠璃ヲ)延	研(玉石ヲ)	(唐様を)学	生便敷	頼之(声)	渺々	麓者	本文	
クガ	ツクリノカセ	マレノ	ヤノ	フシ	ツホ	ラレウツサセ	コ、ロヨク	ノベ	ミカキ	マナビ	ラビタノシ	ライノ	ビヨウノ	フモトノハ	建勲	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△「之」になし	×	×	陽明	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	織田	
×	×本文「作らせられ」	×本文なし	ヤノソリ	×	×	×	○	×	○	×	×	△「之」になし	×	×	池田	
									○						太田	

46	永々	ナカ／＼	×	○	×本文「長々」		
45	雑質(表)	サイ／カ	×	○	×		
44	(出来)畢	ヲワンヌ	×	○	×		
43	詩歌	シイ／カ	×	○	×本文なし		
42	女御更衣	ニヨ／ゴ／コウ／イ	○	○	×		
41	薫(じ)	クン	×	○	×		
40	撥当	ハラツテアタリヲ	○	○	△「躍」のみヲドリあり		
39	舞躍	マイ／ヲトリ	△「舞」になし	○	×		
38	浮(立)	ウキ	×	○	×		
37	拍子	ヒヤウ／シ	×	○	×		
36	鳴(物)	ナリ	×	○	×		
35	花車	キヤ／シヤ	○	○	×本文なし		
34	最(と)	モツトモ	×	○	×本文「尤」		
33	雑質(表)	サイ／カ	×	○	×		
32	(取)統	ツ、キ	×	○	×		
31	(小)雑質	サイ／カ	×	○	×		
30	被差遣	サレ／サシツカハ	×	○	×本文「さし被遣」		
29	能(様)	ヨキ	×	○	×		
28	被攻	ラレ／セメサセ	×	○	×		
27	城楼	セイ／ロウ	○	○	×		
26	下津	シモ／ツ	×	○	×		
25	丹和	×	×	○	×タン／ノ／ワ		
24	降参(申)	カウ／サン	×	○	×		
23	究竟	ク／キヤウ	×	○	×		
22	組討	クミ／ウチ	×	○	×		
21	岩成主税大属	イワ／ナリ／チカラノ カミノ／サ／クワン	△「岩成」になし	○	×		
20	雑質之	サイ／カ／フ	×	○	×		
19	鬮(取)	クジ	○	○	×		
18	(敦重)討	ウタセ	○	○	×		
17	唾(と)	ドツ	×	○	×		
16	雑質	サイ／カ	×	○	×		
15	三織	ミン／カラミ	○	○	×		
	被差遣	サレ／サシツカハ	×	○	×		
	本文					陽明	太田
						織田	
						池田	

79	(被)攻	セメ	×	○	×		
78	上月	コウ／ツキ	×	○	×		
77	尔処	シカツシ／トコロニ	○	○	×		
76	上月	コウ／ツキ	○	○	×		
75	駭之(御馬)	ブチ／ノ	△「之」になし	○	×		
74	(不)斜	ナ、メナラ	×	○	×		
73	(十四)足	モト	○	○	×		
72	濃(させられ)	タミ	○	○	×		
71	狩杖	カリ／ツヘ	○	○	×		
70	(御)鷹山獵	タカヤマ／カリ	△「鷹」になし	○	×		
69	(此)競	キライ	○	○	×		
68	為差	タル／サシ	×	○	×		
67	己(れ)	ヲノ	○	○	×		
66	聞(し)	キコヘ	×	○	×		
65	鹿(之)角(の)	シ、ノ／ツ	×	○	×		
64	嶮(所)	サカシキ	○	○	×		
63	鳥獸	トリ／ケタモノ	×	○	×		
62	為(灰燼)	ナス／クワイ／シン	△「為」になし	○	×		
61	伽藍	カラシ	×	○	×		
60	防戰	フセキ／タ、カイ	×	○	×		
59	拵	コシラヘ	×	○	×		
58	御幸塚	ゴコウ／ツカ	○	○	×		
57	耕作難捨	コウサク／ナキ／ステ	△「耕作」になし	○	×		
56	被差遣	サレ／サシツカハ	×	○	×		
55	頓(五郎)	トン	○	○	×		
54	(同)弟	ヲト、	×	○	×		
53	(うつくしく)改	アラタメ	×	○	×		
52	髮(ゆい)	カミ	×	○	×		
51	姿形	スカタ／カタチ	×	○	×		
50	富樫	ト／カシ	○	○	×		
49	昔年	ソノ／カミ	○	○	×		
48	開山之蓋置	カイ／サン／ノ／フタノ ヲキ	△「開山」になし	○	×		
47	化狄	クハ／テキ	○	○	×		
	本文					陽明	太田
						織田	
						池田	

83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52		
(其)員	生便敷	八幡	勝相撲	強(候)	器量骨柄勝(れて)	阿閉	麻生	綾井	敷下	(百)列	(五)足	(御)鷹師	一足	持参	(御)鷹師	(御)生立	四足	(不 _レ 及)行(二)	寄付	敵舟	持(なし)	愛(しらふ)	敵舟	飾(立)	行	拵	塞(り)退	罷(り)退	志方之(城)	並	其間(に)	本文	
カス	ヲヒタ、シク	ヤワタ	カチヌ、マウ	ツヨク	キリヨウコツ	アッジ	サノサウ	アヤノイ	ヤブノシタ	ツレ	モト	ヒトモト	タカシヤウ	チノサン	タカシヤウ	カイソノタテ	ヨモト	テタテ	ヨリツク	テキセン	モチ	アイ	テキセン	カサリ	テタテ	コシラヘ	ツマリ	マカレノク	シカタノ	ナラビ	ソノマ	建勲	
×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	×	○	×	△	○	×	陽明	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	織田	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	池田	
																△																	太田

111	110		109	108	107	106	105	104	103	102	101		100		99	98	97	96	95		94	93	92	91	90	89	88	87		86	85	84			
鼻熊	三陰(ノ)宿	雀(松原)	(小屋)上(り)	甲(山)	塞(り)く	茨木	下石	追(出し)	茨木	(小口)押	茨木	埴(原)	袒(せられて)	(御)膚	貝(野)	茨木	高槻	高槻	高槻	茨木	狐師川	大(田村)	糠塚	芥川	追上	(御取)飼	(御)生立	(執)固	菱喰	拜(ミ)	持参	不劣	本文		
ハナクマ	ミカケレシユク	原	アカ	カプト	ツマ	イバラキ	ヨロシ	ヨイ	イバラキ	ヨサヘ	イバラキ	×	スガ	×	カイ	イバラキ	タカツキ	タカツキ	タカツキ	×	レウジノカハ	ヲ、	ヌカツカ	ヌカツカ	アクトカハ	ライノボセ	カイ	ソノタテ	カタメ	×	ヲカ	ザンサン	ジノトラ	建勲	
○	○		○	○	○	○	○	○	×	○	×		○		○	×	×	×	○		○	○	○	×	×	×	○	×		○	×	○	○	陽明	
○	△		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	×	○	○	織田	
×	×	×	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	ス、メク	池田
																																			太田

表1-12 『信長記』 卷十二の振仮名

22	21	20	堀	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
究	旁	堀	堀	(政)職	塞(く)	分面	娘	隼巢子	(被)遣	牽上	太逞(キ)	(相)副	(御)狂	暫	(被)塞	(御)責子	分面	乘(させられ)	(御)狂	差殺	(御)道復	堀	本文
キワマル	カタク	ヘイ/サク	×	ノリ	ツマリ	ワカツ/テ	ムスメ	ハヤブサ/ス/コ	ツカハ	ヒキ/ノボセ	フトク/タクマシ	ソヘ	クルイ	シバラク	フセカセ	セ/コ	ワカツ/テ	ノセ	クルイ	サシ/コロシ	ダウ/フク	ヘイ/サク	建勲
×	○	○	○	○	○	×	×	○	×	○	○	○	×	×	○	○	×	×	○	×	○	○	陽明
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	織田
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	池田
																							太田
																							太田
																							太田

116	115	114	113	112		
獣之(通ひもなく)	分面	(京都)上	下(申)	(不)謂(候)	宥(申)	本文
ケタモノ/ノ	ワカツ/テ	ノホセ	ヲリ	×	ナダメ	建勲
し△」之にな	×	○	○	○	○	陽明
○	○	○	○	○	○	織田
×	×	×	○	イハレ	×	池田
						太田

56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23			
検校	検校	検校	(可)楽	楽(く)	励(ミ)	(召)列	鬘計付	(御)折檻	遠野	(御結構之)様	遠野	込(入)	喰(と)	系図	断切	小男鷹	鶴三聯	隼(巢子)	了簡	堀	云為	桐	勤(日々ニ)	弱(き)	己(れ)	薄絵	紅梅	能(宗)	駮(き)	逃(散候)	打擲	桐	生便敷	本文		
ケン/ゲウ	ケン/ゲウ	ケン/ゲウ	タノシム	ラク	ハゲ	ツレ	ノ/シ/ツケ	セツ/カン	トヲノ	タメシ	トヲノ	コミ	ドツ	ケイツ	カンナ/キリ	コノ/リ	ハイタカ/ミ/モト	ハヤブサ	レウ/ケン	ヘイ/サク	シワ/ザ	ツマリ	ツトメ	ヨワ	ヲノ	ハク/エ	コウ/バイ	ヨキ	サワキ	ニゲ	チヨウ/チヤク	ツマリ	ヲ/ビタ、/シク	建勲		
×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	陽明	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	織田
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	池田	
																																			太田	

87	肝魂(を)	キモ(タマシイ)	○	○	×			
86	響(計にて)	ヒビク	○	○	×			
85	叫(声)	サケブ	○	○	×			
84	鐘(長刀)	ヤリ	○	○	×			
83	首(を並る)	カシラ	○	○	×			
82	自念	ジネン	○	○	×			
81	吹田	スイノタ	○	○	×			
80	泊々部	ホウカノベ	○	○	×			
	(不)墓(行)	×			ハカ			
79	頭々	カシラノク	○	○	×			
78	鑢(物)	イ	○	○	×			
77	朽腐(り)	クチノクサ	○	○	×			
76	宝(寺)	タカラ	○	○	×			
75	鎗	ハイタカ	○	○	×			○
74	(御)紋	モン	○	○	×			
73	櫓(〜)	ヤクラ	○	○	○			
72	(御)博士	ハカセ	○	○	×			
71	(愚)革(毛)	アシ	○	○	×			
70	泣(かなしむ)	ナキ	○	○	×			
69	(荒木)妹	イモト	○	○	×			
68	(相)加	クワノリ	リクハ、	○	×			
67	雑賀	サイノカ	○	○	×			
66	(多田)之館	タチ	○	○	×			
65	同者紛(に)	ドウジヤノマギレ	○	○	×			
64	生(か城)	ハダカ	○	○	×			ハタカ
63	泣(かなしむ)	ナキ	○	○	×			カシラ
	頭(をすする)	本文なし			本文なし			
62	曲事	クセノコト	○	○	×			
61	検校	ケンノケウ	×	○	×			
60	重(仕候て)	ヲモク	○	×	×			
59	検校	ケンノケウ	○	○	×			
58	楽々	ラクノク	○	○	×			
57	官配	クハンノハイ	○	○	×			太田
	本文	建敷	陽明	織田	池田			

110	取隠	トリノカクシ	×	○	×				
109	云為	シノワザ	○	○	×				
108	梅檀者	センタンノハ	○	○	×				
107	自念	ジネン	○	○	×				
106	切(れ候)	キラ	○	○	×				
105	下(様に)	ヨリ	○	○	×				
104	膚(二ハ)	ハダ	○	○	×				
103	(甲)着	キ	○	○	×				
102	自念	ジネン	○	○	×				
101	(あら木)妹	イモト	○	○	×				
100	去離	サリノハナレ	○	○	×				
99	忌々敷	イマンノシキ	○	○	×				
98	伯々部	ホウカノベ	○	○	×				
97	鶴塚	ヒヨトリノツカ	○	○	×				
96	首(をすする)	カシラ	○	○	×				
95	(此)調	トノノヘ	○	○	×				
94	差向	サシムケ	○	○	×				
93	(子に)後	ヲクレ	○	○	×				
92	堀欄	ヘイノサク	○	○	×				
91	現々	ゲニノク	○	○	×				
90	(心を)替	カヘ	○	○	×				
89	茨木	イバラノキ	○	○	×				
88	高槻	タカツキ	○	○	×				
	本文	建敷	陽明	織田	池田				太田

表 1-13 『信長記』 卷十三の振仮名

30	飯(之山)	イ、	○	×		
29	木越(ノ)	キゴシ	○	×		
28	徒(者)	イタツラ	○	×		
27	栄螺(坊)	サザノイ	○	×	本文仮名書き	
26	臍(くらへ)	ヘソ	○	○		
25	狭(落させられ)	ハサミ	○	×		○
24	(国土之) 費	ツイヘ	○	×		
23	乏(れり)	ヲトレ	○	×		
22	鄙(事)	イヤシキ	○	×		
21	人物(も)	ジンブツ	○	×		
20	只(より)	カタチ	○	×		○
19	聞(候へとも)	キコヘ	○		本文仮名書き	
18	(御一言) 迫	ツマリ	○	○		○
17	炙(候はん)	アブリ	○		本文仮名書き	
16	術者	バケモノ	○		×本文「ばけ者」	
15	一(御覽シ)	ツクツク	○		ツクく	
14	(御) 殿	ムマヤ	○		「御殿」にミムマヤ	
13	栄螺(坊)	サザノイ	○		本文仮名書き	
12	栄螺(坊)	サザノイ	○		本文仮名書き	
11	廻国	クワイコク	○	×		
10	維(申され)	ツナキ	○		ツナギ	○
9	(御) 架	ホコ	○		本文仮名書き	に「架」あり
8	被(上)	ノホセラレ	○		△「上」にのみ	
7	(御) 道履	タウフク	○	×		タウフク
6	岩室(坊)	イワムロ	○	×		
	枕(を並)	×			マクラ	
5	喉(頸) 搦(切)	ノドノカキ	○		○ノトクヒカキ キリとすべてにあり	
4	怒(に)	ナマシイ	○	×		
3	涕	ナミダ	○	×		
2	膝(之上)	ヒサ	○		ヒザ	
1	孩(子)	ミトリコ	○	○		△「子」になし
	本文	建勲	陽明	織田	池田	太田

57	沈(紅涙ニ)	シツム	○	×		
56	肯(申候)	ウケコイ	○	×		○
55	云(不達(子御道理))	イ、サルトイセ	○	×		
54	(日々) 衰	ヲトロヘ	○	×		
53	発(シ願ヒラ)	ヲコ	○	×		
52	摘	トリコ	○	×		○
51	不(被(忘れ))	サルラレ	○	○		
50	不(直)	サルスナヲナラ	○	×		
49	不(思)	サルニヲモハ	○	×		
48	輝(光明ヲ)	カ、ヤカシ	○	○		
47	湛(池水)	タ、ヘ	○	×		
46	漫々	マンシク	○	×		
45	(尼上) 嵩	タケ	○	×		○
44	直(にして)	スナラ	○	×		○
43	取勝	トリスグリ	○	×		
42	麻生(三五)	サソウ	○	×		
	倍	×			マスく	
41	輝(光明ヲ)	カ、ヤカシ	○	○		○本文「耀」
40	鑄(物)	イ	○	×		
39	育(候)	ハゴクミ	○	○		
38	山越(を取)	ヤマゴシ	○	×		
37	勝(申)	カチ	○	×		
36	塞(く)	ツマリ	○	○		○
35	填(させ)	ウメ	○	×		○
34	填(させ)	ウメ	○	○		
33	太逞驛馬	フトクタクマシキシ	○	×		
32	立川(三左衛門)	タチノカハ	○	○	×本文「ち川」	
31	貞林	テイリン	○	○	本文仮名書き	太田
	本文	建勲	陽明	織田	池田	太田

68	生便敷	ヲ／ヒタ、／シキ	○	キ	×	
67	貴(有様)	イミシキ	○	イミジキ		「貴(き)」にイミシ
66	寵辞	イツキ／カシツキ	○	○		
65	羽衣石	ウ／エイシ	○	ウ／エイシ		
	小鴨(左衛門尉)	×				
64	羽衣石	ウ／エイシ	○	ウ／エイシ		△石には振仮名なし
63	膚(ヲ合)	ハダエ	○	○	×	
	小鴨(左衛門尉)	×				
62	瘦衰(へて)	ヤセ／ヲトロエ		○	×	
61	頭	クビ	○	○	×	
60	頭	カウベ	○	○	×	
59	(持て)続	ツギ	○	ツキ	×	
	叫喚	×				
58	眼焦	モダエ／コカレ		○		
58	(欄際)寄	ヨリ	○	○		
57	瘦衰(へ)	ヤセ／ヲトロ	○	○		
56	塞(く)	ツマリ	○	○		
	飯(道寺)	×				
55	桑実(寺)	クハノ／ミ	○	○		
54	愛智(川)	エンチ	○	○		
	撫(切)	×				
	糟(屋)	×				
53	阿閉(郡)	ア／ヤ	○	○		
52	信楽(口)	シタ／ラ	○	○		
51	信楽(口)	シタ／ラ	○	○		
50	膚(を合)	ハダヘ	○	○		
49	上(せ)	ノ	○	○		
48	拔下(にして)	ヌギ／サゲ	○	○		
	本文					
	建敷					
	陽明					
	織田					
	池田					
	太田					

29	高畠	タカ／ハタケ	○	○	○	タカ／ハタケ
28	小諸	コ／モロ	○	○	○	○
27	小諸	コ／モロ	○	○	○	○
26	貝沼(原)	カイ／ヌマ	○	○	○	○
25	館(を)	タチ	○	○	○	×
24	倫(出し)	ヌスミ	○	○	○	○
23	疎果	ウトミ／ハテ	○	○	○	○
22	己(くか)	ヨノレ	○	○	○	○
21	玄徳(斎)	ケン／トク	○	○	○	×
	日向(玄徳斎)	×				
20	平谷	ヒラ／ヤ	○	○	○	×
19	(租)加	クハ／リ	○	○	○	×
18	藪原	ヤゴ／ハラ	○	○	○	○
17	妻子(口)	ツマ／ゴ	○	○	○	○
16	高野	コウ／ノ	○	○	○	×
15	土田	ドン／タ	○	○	○	○
14	上松(藏人)	アゲ／マツ	○	○	○	○
13	継父	マ／チ、	○	○	○	○
12	繫直(し)	ツナギ／ナラ	○	○	○	×
11	腐(候ハル)	クサリ	○	○	○	○
10	惱(を)	ナヤミ	○	○	○	×
	駁	×				
9	投(させられ)	ナゲ	○	○	○	○
8	斜粉	ナ、／コ	○	○	○	○
	檜皮葺	×				
7	(掛)濫	ラン	○	○	○	○
6	階道	キダ／ハシ	○	○	○	○
5	築垣	ツイ／ガキ	○	○	○	○
4	積(上たる)	ツミ	○	○	○	○
3	群集	クン／ジユ	○	○	○	×
2	生便敷	ヲ／ヒタ、／シキ	○	○	○	×
1	各	ヲノ／	○	○	○	×
	本文					
	建敷					
	陽明					
	織田					
	池田					

表1-15 『信長記』 卷十五の振仮名(太田家本は卷十五欠)

62	後走	ツクレ／バシリ	○	○	△ヲのみあり	本文	建勲	陽明	織田	池田
61	(か)ハ坂之峠	タウゲ	×	○	×	(小身)業	ツキ／ヲトシ	○	○	○
60	(鉄炮)長(竹木)	ダケ	○	○	タケ	(不)容	ワザ	○	○	○
59	藍田(長老)	ラン／デン	○	○	ランテン	(不)尤(人ヲモ)	イレ	○	○	○
58	雪穿(長老)	セツ／シン	○	○	○	(間)髪(ヲ)	ハツ	○	○	○
57	(燭)咽	ムセヒ	○	○	○	清野(美作守)	トガメ	○	○	○
56	喂魚	モタヘ／コガレ	○	○	×	(朝)顔之	キヨノ	○	○	○
55	抱(付)	イダキ	○	○	×	(余仁)勝	ヲ／バタ	○	○	○
54	(焼)上	アカリ	○	○	×	高野	コウノ	○	○	○
53	仮(之御殿)	カリ	○	○	○	(朝)顔之	カヲノ	○	○	○
52	灰跡	クワイ／セキ	○	○	△「灰」のみ振仮名あり	富山	ト／ヤマ	○	○	○
51	助(先陣)	ハケマシ	○	○	×「マシ」は送り仮名として書かれる	(名)借(ミ)	ヲシ	○	○	○
50	寒死(候キ)	コ、ヘ／シニ	○	○	×	蜂蟬之化(命)	ブ／ユウ／ノ／アダナル	○	○	○
49	寒(じたる事)	カン	○	○	×	(朝)顔之	カヲノ	○	○	○
48	小幡	ヲ／バタ	○	○	×	高野	コウノ	○	○	○
47	梗葉	カウ／ガイ	○	○	×	(余仁)勝	カヲノ	○	○	○
46	百井	モ、ノイ	○	○	×	富山	ト／ヤマ	○	○	○
45	姪女	ヌイ	○	○	○	(名)借(ミ)	ヲシ	○	○	○
44	肯(申)	ウケコイ	○	○	×	蜂蟬之化(命)	ブ／ユウ／ノ／アダナル	○	○	○
43	小諸	コ／モロ	○	○	○	(朝)顔之	カヲノ	○	○	○
42	富山	ト／ヤマ	○	○	×	高野	コウノ	○	○	○
41	(名)借(ミ)	ヲシ	○	○	×	(余仁)勝	カヲノ	○	○	○
40	蜂蟬之化(命)	ブ／ユウ／ノ／アダナル	○	○	×	富山	ト／ヤマ	○	○	○
39	(朝)顔之	カヲノ	○	○	×	(名)借(ミ)	ヲシ	○	○	○
38	(余仁)勝	カヲノ	○	○	×	蜂蟬之化(命)	ブ／ユウ／ノ／アダナル	○	○	○
37	高野	コウノ	○	○	×	(朝)顔之	カヲノ	○	○	○
36	小幡	ヲ／バタ	○	○	×	高野	コウノ	○	○	○
35	清野(美作守)	キヨノ	○	○	×	(余仁)勝	カヲノ	○	○	○
34	(不)尤(人ヲモ)	トガメ	○	○	×	富山	ト／ヤマ	○	○	○
33	(間)髪(ヲ)	ハツ	○	○	×	(名)借(ミ)	ヲシ	○	○	○
32	(不)容	イレ	○	○	×	蜂蟬之化(命)	ブ／ユウ／ノ／アダナル	○	○	○
31	(小身)業	ワザ	○	○	×	(朝)顔之	カヲノ	○	○	○
30	撞墮	ツキ／ヲトシ	○	○	×	高野	コウノ	○	○	○

89	(被)退(候)	ノカセ	○	○	○	本文	建勲	陽明	織田	池田
88	退(被申)	ノケ	○	○	×	深澤(城)	フカサワ	○	○	×
87	被(被)	ラレツクサセ	○	○	×	(江)尻	シリ	○	○	×
86	騒動	サウドウ	○	○	×	偽之橋	イツワリ／ノ／ハシ	○	○	×
85	扱(事)	サガス	○	○	×	(諏訪之原を)下	クタリ	○	○	×
84	落人	ヲチ／ウト	○	○	×	川(之面)寒	スサマシク	○	○	×
83	町屋(に)	チヤウ／ヤク	○	○	×	池鯉鮒	チリ／ウ	○	○	○
82	扱(せと)	サガセ	○	○	×	(和)田(鱈)	サカモリ	○	○	○
81	落人	ヲチ／ウト	○	○	×	榊(田忠兵衛)	サカモリ	○	○	○
80	逆(川甚五郎)	サ	○	○	×	(敵)区(也)	マチク	○	○	×
79	種村(彦次郎)	タナムラ	○	○	×	(御)暇請	イトマ／ゴイ	○	○	×
78	塙(伝三郎)	ハノウ	○	○	×	(軍)之(巷)	チマタ	○	○	×
77	扶(可申)	タスケ	○	○	×	(懸)込	コミ	○	○	×
76	(火)焰	エン	○	○	×	(御)暇請	イトマ／ゴイ	○	○	×
75	(互)知	シツツ	○	○	×	(敵)区(也)	マチク	○	○	×
74	不(劣)ラ	ラジト	○	○	×	(御)暇請	イトマ／ゴイ	○	○	×
73	(僉)議(区)也	マチク	○	○	×	(軍)之(巷)	チマタ	○	○	×
72	(懸)込	マチク	○	○	×	(御)暇請	イトマ／ゴイ	○	○	×
71	(軍)之(巷)	チマタ	○	○	×	(敵)区(也)	マチク	○	○	×
70	(懸)込	コミ	○	○	×	(御)暇請	イトマ／ゴイ	○	○	×
69	(和)田(鱈)	サカモリ	○	○	×	(敵)区(也)	マチク	○	○	×
68	池鯉鮒	チリ／ウ	○	○	×	(御)暇請	イトマ／ゴイ	○	○	×
67	川(之面)寒	スサマシク	○	○	×	(軍)之(巷)	チマタ	○	○	×
66	(諏訪之原を)下	クタリ	○	○	×	(懸)込	コミ	○	○	×
65	偽之橋	イツワリ／ノ／ハシ	○	○	×	(和)田(鱈)	サカモリ	○	○	×
64	(江)尻	シリ	○	○	×	榊(田忠兵衛)	サカモリ	○	○	×
63	深澤(城)	フカサワ	○	○	×	(敵)区(也)	マチク	○	○	×

表3 『信長記』首巻写本の振仮名

29	(敵の) 輔	ツラ	○	
28	急雨	ムラ/サメ	○	
27	(不可) 忍	タマル	○	
26	(黒) 末	ズエ	○	
25	味鏡	アチマ	○	
24	角(田新五)	ツノ	○	
23	散(くに)	サン	○	
22	堀欄	ヘイ/サク	○	
21	角(田新五)	ツノ	○	
20	生(か城)	ハダカ	○	
19	充(と)	アツ	○	
18	(御) 膚	ハダエ	○	
17	馬鹿(者)	バ/カ	○	
16	撞(落されて)	ツキ	○	
15	一長	イチ/ヲトナ	○	
14	鳴原	シキ/ワラ	○	
13	高北	コウ/キタ	○	
12	走(らかし)	ハシ	○	
11	健者	スクヤカ/モノ	○	
10	桃巖	トウ/ガン	○	
9	(風来) 而	テハ	○	
8	疫癘	エキ/レイ	○	
7	古渡(の城)	フル/ワタリ	○	
6	見悪(事)	ミン/クキ	○	
5	(織田主水) 正	カミ	○	
4	被(られ)	かうむら	○	平仮名
3	造酒(丞)	サ/ケノ	○	
2	月巖	ケツ/ガン	○	
1	西巖	サイ/ガン	○	
	織田家本の本文	織田家本の振仮名	陽明文庫本	備考

59	(其) 娘(を)	ムスメ	×	
58	毒飼(を仕)	トグ/カイ	○	
57	誅戮	チウ/リク	○	
56	横鏝	ヨ/キ	○	
55	一々	ツク/ク	○	
54	(造酒) 正	カミ	○	
53	鞆(左衛門)	ウ	○	
52	鋤鎌(持より)	スキ/クワ	○	
51	味鏡(村)	アチマ	○	アチマ
50	葭(原)	ヨシ	○	
49	蛭(池)	ジャ	○	
48	(京) 童	ワランベ	○	
47	汝(等者)	ナンヂ	○	
46	小(川表)	コ	○	
45	(家宅) 門(口に)	カト	○	
44	門柱	カド/ハシラ	○	
43	平(美作)	ハイノ	○	
42	忍(躰)	シノブ	×	陽「忍ふ躰」
41	有随(成)	ウ/ズイ	○	
40	(清) 須	ス	×	
39	(勝に乗て) 奢	ラゴリ	○	
38	(麦苗) 薙(せられ)	ナカ	○	
37	鳴原之(城)	シキ/ハラノ	○	
36	池鯉鮒之(城)	チ/リ/ウ/ノ	○	
35	沓懸(城)	クツ/カケノ	○	
34	下(立て)	マリ	○	
33	寔(命者)	マコトニ	○	
32	(先を) 争	アラソイ	○	アラソヒ
31	下(立て)	マリ	○	
30	(沓懸の) 到(下)	タウ	○	
	織田家本の本文	織田家本の振仮名	陽明文庫本	備考

77	改(て)	アラタメ	×	
76	(長井隼人)正	カミ	×	
75	請(手に)	ウケ	○	
74	崩(あり)	カサ	○	
73	生(か城)	ハタカ	○	
72	詞(をかけ候)	コトハ	○	
71	(半国の)主	アルシ	○	
70	啓(の口)	ヒサ	ヒザ	
69	為(レ孝)	ナル	○	
68	啓(を難切)	スネ	○	
67	(竹越道)塵	ヂン	○	
66	消(レ肝)	ケスコト	○	
65	(時を)期(事)	マツ	○	
64	下(られ候)	ヲリ	○	
63	(勝に乗て)奢	ヲコリ	ヲゴリ	
62	(土岐)頼藝	ヨリノリ	○	
61	主(者)	ヌシ	○	
60	(御)席	ムシロ	○	備考
	織田家本の本文	織田家本の振仮名	陽明文庫本	